

A子にとっては、賞を取るために読書感想文を書いたのではなく、感動を素直に言葉でA子の方に今年の方が私は満足しています。

小学校で学級担任をしていました時、読書感想文のコンクールの後にA子から言われた言葉である。

学級の中で、読書好きで特に表現力が優れていたA子が、前年は賞を取れたが、その年は取れなかつた時の一言である。

前年の作品は、私が指導を繰り返し、推敲を重ねるうちに、いつの間にか自分の本当の感動や伝えたい思い、使いたい言葉が消えていったのである。

A子にとっては、賞を取るために読書感想文を書いたのではなく、感動を素直に言葉でA子の方に今年の方が私は満足しています。

それは、独りよがりの説得を伴つた指導であり、A子は決して納得はしていかなかったのである。この言葉は、その後の私の指導方法を変えた。

今年度、相双教育事務所では、「愛と英知と創造」の基本理念のもと、「英知」については「研ぎ澄まされた知性、学びの創造」をキーワードに「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して取り組んでいる。

その中で、子どもたちに十分な時間を与え、考えさせたり、話合いをさせたりして授業時間を作りました。その結果、第一回目の調査より三十九名増となる九十九名の子どもから「村の学校に就学する」という回答をいただきました。本当に感謝の気持ちで一杯です。

震災後七年も経ち、それぞれの家庭の事情も違うので、村の学校に就学して欲しいと言つても簡単なことではありません。しかし、それぞれの実家のように、実家がしつかりしていれば何かあつたときに頼りになると思います。すぐに村内に戻つて就学できない方々にも心の支援や安心感につながるよう、本質的な教育をしっかりと行っていきたいと思います。

社会につなぎ 未来を切り拓く

相双の教育

『ASA KATSU』

葛尾村立葛尾中学校

教頭 安部 孝

本校では朝学習の時間を「ASA KATSU」と称して、各種検定の学習と各教科の学習・読書を実施しています。昨年度、生徒達の検定への取組が思わしくなかつたことや上させること、またアクティブな学びを実施するために、朝学習を読書だけではなく、生徒の思考を活性化するような取組にしようと考えたことから始めました。

まず、各種検定の学習については、年間計画に受検日を設定し、約二週間の準備期間に全員が学習します。学習の方法はタブレットPCに対策アプリを入れ、各自が教室前方にあるラーニングスペースで学習します。生徒同士が教え合い、また先生方も生徒達の周囲で助言等を行うような環境にしています。本校では、

卒業までに各種検定の三級以上との取得を目指しています。四月中は現職教育担当が準備したクイズやなぞなぞを解かせ、朝の思考を活性化させるような取組を行い、慣れてきたら、生徒たちにクイズを考えさせ、先生の役目をさせました。その結果、うまく進行できなかつた生徒がその後再挑戦したいと申し出たり、先輩の進め方を参考にする生徒が出てきたりとプレゼンテーション能力が向上しています。先生方の手を離れ、生徒の自主的な活動になるのが理想形と考えています。

最後に、タブレットPCやデジタル教科書を活用して学習することで、あきらめが早くなる弊害が生まれやすいようを感じています。もつともつくり考えて活動し、自分の意見を深めさせるためには、読書量を増やすことが一つの解決策になると見え、「ASA KATSU」の中に読書の時間を増やしていくなどバランスを取り組む習慣が身につくよ

うに、「ASA KATSU」の中の様子については、本校ホームページに随時掲載していますのでご覧いただき、ご指導いただけますと幸いです。

沙羅の木を植えました。月命日には黙祷を捧げ、新地駅前や地下道の清掃を行っています。また、震災当時の記憶や、紙に託し届けていたくことで、次世代へ伝え残すことを目指し、「おもひの木ポスト」と名付けて、想いを募ることも始めました。



＜ASA KATSUの様子＞

『おもひの木プロジェクト ～震災から大切な命を 守るために～』

福島県立新地高等学校
教諭 大越 徹也

東日本大震災が発生しました。新地高等学校では、在校生一名、十日前に卒業式を終えたばかりの卒業生八名が津波の犠牲となりました。

本校では、震災で亡くなられた方々を追悼すると共に、震災を風化させず、今後も起

るに、岩手県や宮城県などの被災地の高校生や地域の方々と一緒に、震災で被災した語り部の方々から話を聴く活動を中心に行なっています。新地町の「やるしかねえべ祭」では活動報告や募金活動を行いました。今後は、過去の震災の歴史に関する調査と東日本大震災で被災した語り部の方々から話を聴く活動を行ないます。新地高等学校ホームページをご覗ください。本校の教育活動に今後ともご協力いただき

ますよう、よろしくお願ひいたします。



＜おもひの木の植樹＞

本校では、震災で亡くなられた方々を追悼すると共に、震災を風化させず、今後も起

るに、岩手県や宮城県などの被災地の高校生や地域の方々と一緒に、震災で被災した語り部の方々から話を聴く活動を行ないます。新地町の震災の歴史について調べた内容に関しても、十一月に奈良大学で開催される全国高校生歴史フォーラムにおいて、発表する機会

もいただきました。また、来年一月には宮城県の石巻市や南三陸町の方々からお話を伺う予定です。

おもひの木プロジェクトの活動を通して、生徒や被災された方々の震災に対する想いを後世へと伝えると共に、生徒自身が未来に向かって歩み続ける力を育成することがで

きると感じています。福島県の沿岸部だからこそできる活動であり、携わることに誇りをもつて取り組んでいます。

本校では引き続き、被災された方々の経験や震災への想いを募っています。詳しくは新地高等学校ホームページをご覗ください。本校の教育活動に今後ともご協力いただき

ますよう、よろしくお願ひいたします。

『飯館村三小学校の運動習慣化への取組』

【講師 今井 将太】

草野・飯桶・白石小では、震災以来、川俣町の仮設校舎で学校生活を送っています。スクールバス通学や制約のある日課など様々な制限があるため、運動する機会が少なく、体力がつきにくいことが本校の課題です。その課題解決に向けて、運動が習慣化できるよう、学校全体で次のような取り組み、心身を目覚めさせ、活力ある一日をスタートさせています。児童は「朝から体を動かすのは楽しい」「体力がつきそう」という思いで取り組む一方で、「疲れる」「走るのが嫌い」という消極的な思いも持っています。したがって、今後は、個人の目標を具体的に設定することや個人の記録を合計し、学級全体の記録と関連させて目標に進むことで、さらに体力を向上させ

草野・飯桶・白石小では、震災以来、川俣町の仮設校舎で学校生活を送っています。スクールバス通学や制約のある日課など様々な制限があるため、運動する機会が少なく、体力がつきにくいことが本校の課題です。その課題解決に向けて、運動が習慣化できるよう、学校全体で次のような取り組み、心身を目覚めさせ、活力ある一日をスタートさせています。児童は「朝から体を動かすのは楽しい」「体力がつきそう」という思いで取り組む一方で、「疲れる」「走のが

る」といった教員の意見もあつたことから、研修会を行いました。体育部以外の教師が全校生に適切な言葉かけができるようになり、指導力の向上を図ることができます。今後は、教師一人一人が各動作が主運動のどの動きにつながっているのかを理解するとともに、競争重視にならないように留意して実践していくことを考えていました。

「朝マラソン」では、朝の短い時間を活用して持久走に取り組み、心身を目覚めさせ、活力ある一日をスタートさせています。

「業間運動」では、時期に合わせて取り組む内容を変えています。一学期は新体力テストに向けた基礎体力向上や運動身体づくりプログラム、二学期は持久走記録会に向けた「村巡りマラソンカード」を活用した全校生での五分間走、三学期は縄跳び記録会に向けて、全校生で持久跳びの練習と校内ランニングを活用

『北から南から』 ～新採用教員として考えること～



＜朝マラソンの様子＞

相馬市立大野小学校 教諭 川崎 桂子

四月に辞令を拝受してから、半年が過ぎました。年度当初は、新しい生活に慣れず、落ち込む日もありました。しかし、同僚の先生方に助けていたり、同じ初任者の仲間と研修を受けたりする中で、少しずつ自分なりの仕事のリズムをつかんでいくことがで

ます。児童は「朝から体を動かすのは楽しい」「体力がつきそう」という思いで取り組む一方で、「疲れる」「走るのが嫌い」という消極的な思いも持っています。したがって、今後は、個人の目標を具体的に設定することや個人の記録を合計し、学級全体の記録と関連させて目標に進むことで、さらに体力を向上させ

ます。児童は「朝から体を動かすのは楽しい」「体力がつきそう」という思いで取り組む一方で、「疲れる」「走のが

る」という消極的な思いも持っています。したがって、今後は、個人の目標を具体的に設定することや個人の記録を合計し、学級全体の記録と関連させて目標に進むことで、さらに体力を向上させ

ます。児童は「朝から体を動かすのは楽しい」「体力がつきそう」という思いで取り組む一方で、「疲れる」「走のが

る」という消極的な思いも持っています。したがって、今後は、個人の目標を具体的に設定することや個人の記録を合計し、学級全体の記録と関連させて目標に進むことで、さらに体力を向上させ

ます。児童は「朝から体を動かすのは楽しい」「体力がつきそう」という思いで取り組む一方で、「疲れる」「走のが

ていいたいと考えています。

した各種技に挑戦しています。

きるようになりました。

たちとのにぎやかな生活が不

安を吹き飛ばしてくれ、樂しく充実した日々を過ごしています。

現在、三年生の担任として、

試行錯誤をしながら学級経営に取り組んでいます。単学級

で学んでいる子ども達は、こ

れまで二年間、同じメンバー

で生活してきました。その

ため、お互いの性格はある程

度把握しています。そのこと

が、学校生活の中での影響

を与えることもあれば、そ

うでないこともあります。ま

ずは、私自身が率先して、子

ども達のよいところをたくさん

見つけ、認めていくことを心

がけています。それが、子

ども達にとって友達の新たな一

面を知ることにつながり、お

互いの関係が深まっていくと

考えるからです。

そこで国語科としては、一

人一人がしっかりと自分の考

えをもち、それを相手に伝え

がけています。それが、子

ども達にとって友達の新たな一

面を知ることにつながり、お

互いの関係が深まっていくと

考えるからです。

今年度は、様々な研修に参

加することができ、多くのこ

とを学ばさせていただいてい

ます。研修に参加して、より

多くのことを吸収するために

多くのことと話をしたいと考

は、自分から意欲的に発言す

ることが重要だと実感しま

した。

今後も、研修を通して、教師

としての専門性を身につけな

がら、子ども達がお互いを認

め合い、自主的に行動するこ

とができる温かい学級を目指

していきたいと思います。

今後も継続して指導を続け、

考え方を深め合えるような話合

い活動ができるようにしてい

きたいと考えています。その

ためにも、一人一人が安心し

て発言できる、お互いを認め

合うことができる学級になる

よう努めていきたいと思いま

す。

相馬市立日立木小学校

養護教諭 渡邊 舞香

授業終わりのチャイムとともに「先生、先生」と子ども達が保健室へやつてきます。委員会活動や手足を擦りむいた子など来室理由は様々ですが、休み時間の保健室はとても賑やかです。私は、子ども達にとつて保健室を『心と体が元気になる場所』そして『健康新生の術を学ぶ場所』に康に生きる術を学ぶ場所にたいと考えています。そのため、多種多様な訴えをしつかり受け止めるとともに複眼的に症状を把握し、迅速かつ適切な処置を施すことで、来室した児童が笑顔で教室へ戻れるよう努めています。

養護教諭の魅力は、児童の成長に携われることです。うな歯処置率の掲示物の前で「むし歯治したよ」と誇らしげに話す子や教材掲示に足を止めました。この結果を残せた理由を考へてみると、チームとチームに携わってくれたすべての人を含めた「Team TOMIOKA」にあると思います。

今年度は、多くの先生方がらご指導いただき研修に励んでいます。周囲の先生方や子ども達に支えられ勤務でくることへの感謝の気持ちと教師としての情熱と謙虚さを忘れず、今後も真摯に学び続けます。

H 29 インターハイは、いろいろな意味で特別な大会でした。一つ目は、ふたば未来学園高校が単独で出場する初めての全国大会であること。二つ目は、前任者である大堀二郎監督が退任されて初の全国大会であったこと。そして、三つ目には、自分自身がチームを率い、教諭として全国大会に臨んだこと。例年とは、まるで違う大会かのように感じました。

『T a i K o B u』

福島県立相馬高等学校
教諭 伏見 裕樹

相双の復興・創生を目指して

Gが強化練習会に駆けつけ、直接指導に当たつてくれたこと、「④携わつてくれたすべての方が全力で応援・協力してくれたこと」、そして、「⑤チームが一丸となり、同じ目標（全種目制覇）を持って闘ったこと」が今回の結果につながつたと思います。

大会を経て、指導者間の連携や生徒理解が本当に大切であると感じました。今後もコミュニケーション能力を高め、共に学べる環境づくりに努めたいと思います。

そんな思いを感じつつ迎えたインターハイでは、六種目中五種目制覇という史上初の結果を残すことができました。この結果を残せた理由を考へてみると、チームとチームに携わってくれたすべての人を含めた「Team TOMIOKA」にあります。

具体的には、「①指導者間で密な連携や協力をして、一人一人がチームの柱として大いに当たつてくれたこと」と、「②選手一人一人が自分のやるべきことに責任を持ち、闘ったこと」、「③O B・O C」など、各所から演奏依頼があり続けたこと、



<市民まつりでの演奏>

職責遂行に努めたいと思います。福島県立ふたば未来学園

高等学校

教諭 本多 裕樹

それらのほぼ全ての機会において演奏しているのが、相馬太鼓部の代表曲「相馬の宵」です。相馬盆唄の笛とやぐら太鼓の音に合わせて楽しげに踊る様子、祭りの後の過ぎ去る夏を惜しむ様子を、高校生の笑顔と若さみなぎるパワーで表現した曲です。相馬太鼓部には太鼓経験者がいないため、その情景を「ドン」としながらもコミュニケーション能力を高め、共に学べる環境づくりに努めたいと思います。

高校に入学して初めて太鼓を叩くことになる新入生は、馴れない手つきでバチを握る振り上げが続くので筋肉痛や腱鞘炎を起こしたり、夏の暑い中の練習で熱中症になる生徒が出たり、運動部にも引けを取らないハーハードさです。また、曲のセンターやバートを決めるため、運営や審査がすべて生徒だけで行われる「TKB」という一発勝負のオーディションもあります。TKBの直前の一年生は、普段にも増して必死に練習し、その一年生を鍛え上げるために、先輩は付きつきりで指導します。そうして選ばれたメンバーがさらに練習し、演奏を披露する」となります。

そこには辛かつたり悔しかつたりした思いを乗り越えながら、心身共に成長していく生徒の姿があります。県内では、地域で太鼓団体を組織し、子供の頃から太鼓に触れ、優れた演奏をする団体が増えています。そのため、今年度のコンクールでは、良い順位を残すことが出来ました。しかし、短い高校生活の中で心身共に成長し、出せるようになつた力強い「ドン」という太鼓の音が多くの方々の心の支えや地域のためには少しでも貢献できれば幸いです。